

大 学 図 書 館 周 題 研 究 会 京 都

〒 607-8175 京都市山科区大宅山田町 34

京都橘女子大学図書館 田北十生気付

(Tel) 075-574-4118

(Fax) 075-574-4124

第 3 1 回 全 国 大 会 は 京 都 に 決 定 !

来年度の大図研全国大会会場は京都でという要請がなされ、9月7日の支部委員会で討議の結果、これを受けることになりました。

大会準備及び当日の大会運営等、支部委員だけでは到底出来ませんので、京都支部会員の皆様のご協力がどうしても必要です。

そこで、大会準備実行委員会を支部委員は勿論、会員のみなさんから募って、第31回全国大会をみんなの力で成功させたいと思います。

具体案は、次回支部委員会で検討することとしましたが、みなさんの積極的ご協力を今からお願い申し上げます。

支部委員会の体制（敬称略）

- ・ 支部長 篠原俊夫（京都大学総合人間学部図書館）
- ・ 副支部長 竹本文夫（元同志社大学人文科学研究所図書室）
- ・ 事務局長 大館和夫（京都学園大学図書館）
- ・ 支部報編集長 田北十生（京都橘女子大学図書館）
- （支部報発送 堤美智子 元支部委員／京都大学総合人間学部図書館）
- ・ 組織・ML担当 呑海沙織（京都大学工学部電気系図書室）
- ・ 研究企画 井上雅人（立命館大学総合情報センター）
- ・ 財政 中嶋スエ子（京都大学工学部航空宇宙工学図書室）

監査委員

堤 豪範（京都大学附属図書館）

那須たみ子（京都大学理学部地質学
鉱物学図書室）

全国委員

篠原俊夫（京都大学総合人間学部図
書館）

* 全国大会成功の取り組みを通じて

大図研京都支部の新しい支部活動を作り出し、支部をさらに活性化することで、新しい展望を切り開きましょう！！

目	第31回全国大会は京都に決定！……1頁
次	新支部委員会の体制……1頁
	出版流通をめぐる危機的状況についての考察…2頁
	読書雑感「狼と駆ける女たち」……4頁
	第1回支部委員会報告……5頁
	連載小説(21回) リュウ……6頁
	新企画構想の募集等について……7頁
	数珠つなぎ(41回)……8頁
ご意見・ご要望、投稿はメール、又はFAXで 編集気付（kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp）田北まで	

出版流通をめぐる危機的状況についての考察 または緑陰読書始末記

篠原俊夫

この夏も例にもれず、精神を集中して緑陰読書に励むというわけにはいかなかった。従って、私の夏の総決算たる読書報告もささやかなものにとどまる。無論、心頭を滅却して学術書に没入するということにはならず、窓から吹き込んでくる微風に半分まどろみながら、あまり固すぎない本だけ読むというスタイルに終始した。

以下、その中から印象に残ったものをいくつか紹介しておきたい。また、紹介と言いつつ自説を繰り広げることについても、いつもの通りのスタイルだがお許しいただきたい。紹介しておきたいのは、下記の2冊。いずれも出版流通に関わる本で、6月に出版されたばかりである。

「超激辛言う爆笑鼎談・出版に未来はあるか」井上家隆幸・永江朗・安原顕著 編 (7ヤ)書房
「出版社と書店はいかにして消えていくか・近代流通システムの終焉」小田光雄著 ぱる出版

私はオカルトを信じない人間だから、ノストラダムスの予言がどうこうという類の本は一切読んだことがないし、これからも読まないつもりである。しかし、科学的根拠がなくても漠然とした不安から、人間がなだれをうって動き、結果として予期せぬ社会現象が生じることは理解できる。それをもって予言が的中したというなら、自身の妄想の所産である。これはいきなりの脱線で本論は別にある。

銀行が倒産するという時代に、出版流通に関わる世界の危機的状況など取るに足らないことかも知れないが、図書館に関わりのある人間にとっては、見過ごすことができない事態である。大不況の渦中で、出版業だけが好況を誇るということは、あり得ないだろうが、内部の関係者が目前の危機にやっきになって取り組んでいる間に、事態は想像を絶するほど深刻になっているという。

郊外型大規模書店が増えてゆくなかで、雑誌と少しばかりの書籍と文房具などをあわせて売っていた近所の店がいつの間にか無くなっている。

大規模書店にしたところで、利益が増大しているわけではなく、利益率そのものはじりじりと低下し続けている。不況で購買意欲の薄れた読者を相手に大中小の書店が入り乱れて、顧客の争奪戦を演じている。利益はあがらなくても、出版業者は自転車操業で、売れない本を作り続ける。大勢の従業員を抱えて、出版活動を休止するわけにはゆかないから売れる売れないに関係なく自転車操業的に毎月数え切れないほどの単行本と雑誌が作り出される。

返品を山を抱えて、出版社も大手取次業者も書店経営者も巨額の負債を抱え込むことになった。どこをとっても不況のどん底で好転する兆しは見えない。

このままなすところ無く、手を拱いていれば、確実に出版流通の終焉を迎えることになる。そしていったん全面的な崩壊がおこれば、立ち直ることは不可能である。

これまで出版業界は不況に強いと言われてきた。不況でも本まで売れなくなるわけはないと思われてきた。どんな時にも本は求められてきたし、娯楽としての読書にしても安いものだという神話があった。しかし、神話は終わった。不急不要の本は買わずに、公共図書館で借りて済ませる。一転して図書館が出版社や小売り書店の目の敵扱いされることにもなる。

しかし、その図書館にしたところで資料費が削られて本の購入が思い通りにはゆかないのだ。この鼎談は勢い余って、ついには出版流通業界が消滅して、個人の読者は買いためた本を読んで余生を暮らすという事態まで想定する始末だ。

欲しい本があれば見境なく買い（安い本に限っては）、とりあえず積み込んでおくことを長年繰り返してきた私などには痛くもかゆくもないと言いたいところだが、そんなのんきな話をしている場合ではなからう。出版社も書店も検討違いの図書館パッシングなどしている暇があったら目前の危機をどう突破できるのか、知恵を絞れと言いたい。

小田光雄の本のタイトルだけみれば出版業が消えてゆくのは、もはや既定の事実でもあるかのような印象を受ける。別に著者がこけおどしで、虚言を弄しているわけではない。出版界の現状をまじめに分析すれば、誰がやってもそこに到達するしかない結論なのだ。

今夏、大図研東京大会の出版流通の分科会でも、出版労連の関係者の出席を得て、さまざまに出版業界や小売り書店の苦境について聞く機会があった。業界関係者、図書館関係者を含めて、今のところ、中小規模の出版社の存続には再販制の維持は欠かせないというのが一般的な見解だろう。私も大筋のところでは、再販制維持は必要だと考えてきた。

しかし、再販制の維持がプラスの要因としてのみ作用するというわけにはゆかないのも事実である。再販制があるために、売れ残りの本について低価格で供給する等の弾力的な対応ができていくのだ。残された道は山のような書店からの返本を不本意ながら断裁するか、こっそりと裏のルートから古本業界に流すしか方法がない。これが書物にとって幸福な道だろうか。安売りを肯んずるくらいなら、潔く断頭台の露と消えますなどという時代がかった台詞まで想像してしまう。

読書人や出版流通に関わる人たちは、書物の精神性にこだわるあまり、それがバーゲンセールなどの対象になると自身の精神性が否定されたような苦痛を覚えるのだろうか。

いま東京を中心に多くの支店をもつブックオフという古本屋があるらしい。図書館員なら常識として知っていなければならないところだろうが、小生は不明にして小田の本を読むまで知らなかった。この古本屋は古本に関する知識がなくても経営できる古本屋さんをうたい文句にシステムの大量に安価な古本を提供している。古書店のマクドナルドかも知れない。そこでは、ブランショもフーコーも一律に100円均一で売られている。ただし、これはものの例えですべての古本をは100円で売っているというわけではない。

要は世界的思想家も赤川次郎も宇能鴻一郎も等しく、単なるものとして売られているという状況があるということである。心ある人がこの世紀末的風景を慨嘆して、ブランショやフーコーの本を要りもしないのにせつせと購入していたらしい。世界の思想的大家に対してなんたる扱いかという義憤がそうさせたのだろう。

しかし、そこまでやるかというのが私の正直な感想だ。売れないマルクスが売れる赤川の後塵を拝して二束三文で売られるのは昔も今も変わらない風景であり、格別嘆くことはない。要するに書物の精神性に過度な思い入れをするのは間違いだと思うのだ。

夜店で50円で売られようが、売れないからと古本屋で買い取りを拒否されようが、そんなものは書物の内面的な価値と何の関係もない。いいではないか。二束三文で世界の名

著が買えることは懐の寂しい青年の読書に寄与することで、悪いことではあるまい。

固定観念にとらわれず、出版業、取次、書店、図書館、読者が共倒れせず、共存できる道を見つけるしか生き延びる方途がない。これまでの流通システムを根底的に見直して、新たな関係を構築しなければ、現在のもたれ合いのなかで共倒れになるしか残された道がないということである。

この2冊の本は、大手の出版業者で知っていても口にできないこと、マイナーな出版業でなければ知り得ない末端の危機的状況について自分を棚にあげずに率直に語っているために迫力と説得力がある。きれいごとを言っても企画から編集まで一切プロダクション任せで、一種の名義貸しで食っているような「一流」出版社に本当の意味での危機意識はないのである。

日銭を稼ぐだけにあくせくしている出版界なぞ用がないと切り捨てたいところだが、出版業界や書店が倒れてしまったら、大学図書館も困るが、なにより私が困る。もう遅いかも知れないが、本気で出版流通の本当の意味での近代化をを考えて欲しい。

生き残りや新生を検討する過程では、これまで出版流通を守る砦と考えられてきた、再販制や委託販売制度をも徹底して見直す必要があるということである。大学図書館にしても人ごとではない。尻に火がついていることでは、同じことである。

(しのはら としお 京都大学総合人間学部図書館)

読書雑感 「狼と駆ける女たち—「野性の女」元型の神話と物語—」

クラリック・ピンコラ・エステス著 原真佐子／植松みどり訳 新潮社

Women Who Run With the Wolves -Myths and Stories of the Wild Woman Archetype -

by Clarissa Pinkola Estes, ph. D.

田北十生

本屋さんで題名に引かれて買ったのですが、いざ読んでみると素晴らしい内容の本で、この本を見つけた自分に自分で感心しています。著者はアメリカで異文化間研究と臨床心理学の博士号を持つユング派の精神分析医。一方伝承物語の語り部・詩人でもある。この本はニューヨークタイムズ・ブック・レビューのベストセラーズ・リストに80週間以上載り続けたらしい。

野性の女を取り戻すことが如何に人生を生き生きと力強く生きるうえで大切なことかを、伝承物語や童話を例に取りながら、その物語に深く埋められている人間の生きるための知恵を掘り出していきます。ここでは、野性の女として語られています、それは人間全体（男も含む）生きる知恵を解明していると感じました。私流に表現すれば、どんな悲惨な状況の中でも胸を張って自分の人生にYESと云える行き方を探っている本です。

人生の途上での大きな障害を不幸と見るか、天が送ってくれたプレゼント、チャンスと見るかで、その人に生き様が変わります。でも、何故「狼」と駆けるのか—それはこの本を読んでみればわかります。（紙面の都合で書けません！）

(たきた かずお 京都橘女子大学図書館)

第1回京都支部委員会報告

1999年9月7日(火)同志社大学クローバーハウス(午後7時~9時)

出席:篠原、中嶋、呑海、田北、井上、大館、大綱(オブザーバー) 欠席:竹本

【報告事項】

1. 第30回全国大会(東京)8月7日(土)~9日(月)
 - ・京都支部からの参加者は5名。もっと参加者が増えてほしい。
 - ・林望氏の記念講演は、書誌学者としての立場から、示唆に富む書物に関する知識を披露された。
2. 1999/2000年度第1回全国委員会 8月7日(土)
 - ・松井委員長は退任するが、後任は決まらず。次回全国委員会までに候補者を決定する。
 - ・第31回全国大会は京都支部に検討を依頼する。
3. 会員情報 ・97名(前回)→92名(現在)
4. 財政情報

・1999年度会費納入者 61名	・1998年度会費未納者 4名
・1997年度会費未納者 1名	・1996年度会費未納者 1名

【審議事項】

1. 支部委員任務分担について
 - ・支部長 篠原
 - ・副支部長 竹本
 - ・事務局長 大館
 - ・支部報編集 田北
 - ・支部報印刷 田北
 - ・支部報発送 堤美智子(一般会員)
 - ・ML担当 呑海
 - ・研究企画 井上
 - ・組織 呑海
 - ・財政 中嶋
2. 今年度の活動について
 - 1) 第31回全国大会(京都)
 - ・京都支部として開催に向けて取り組むことを決定。
 - ・開催日程 第1候補 2000年8月5日(土)~8月7日(月)
 - 第2候補 8月26日(土)~8月28日(月)
 - ・会場は京都市内のホテルを各支部委員が分担して調べる。
 - 参加者数の見込みを130名前後と想定し、全体会会場(1室)及び分科会会場(予備も含め6室程度)を確保する。
 - 立命館大学平和ミュージアムも候補にあげておく。
 - ・研究集会は全国大会の後に開催する。
 - ・近畿4支部合同例会を京都支部主催で1月に開催する。
 - ・支部例会を3~4回開催する。
 3. 支部報について
 - 1) 9月号について /数珠つなぎ
 - 2) 10月について /数珠つなぎ
 4. 支部報復刻版の発行について
 - ・全ての支部報が収集できた。
 5. 研究集会(7.3)の記録の出版化について
 - ・集会を忠実に記録するだけでなく、さらに内容を練り上げてもう少しまとまったかたちで出版する方向で取り組む。
 6. その他
 - ・ML「ゆりかもめ」のサーバーを移す方向で検討。
 7. 次回支部委員会 10月5日(火)

新連載小説 第21回



リュウ

西田 治

「失礼ですがお幾つになられるんですか？」

「86です」

「元気ですねえ！」

「一人暮らしをしてると元気なのが一番じゃよ」

「お独りですか…！ ご家族の方は…？」

「息子独りに娘が二人。娘は皆嫁に行ってしまうた。娘は嫁に行くので当たり前じゃが、一人息子は、山が好きで、山登りばかりしておって！ それで、とうとう帰ってこんようになつた」と気落ちしたように云つた。

「遭難されたんですか？」と私も神妙になって聞いた。

「いや、東京です」

「ああ…！ で奥さんは、どうされたんですか？」

「女房か。あれはわがままなところがあるが良い女房です、私と違って若いときから病弱な体質で、その上私が苦勞ばかりかけてしまうた！ それで、とうとう2年前に…」と老人は寂しそうに鼻をすすつた。

「お亡くなりになつたんですか？」

「いや、息子の所に行きおつた！」

「はあ…！」

私は赤面した。体の力が抜けてしまった。

「そういうお宅は？」と老人が思い直したように聞いた。

「はあ、独りです」

「ほお、そりゃあ いかん！」

「そのかわり、犬が4匹います」

「ほう！それはそれは、で、他の犬は…？」

老人はリュウを眺めながら聞いた。リュウは横を向いた。

「ええ、最初は一緒に連れて来ていたんですが、店の中に入りたがったりして大変なんで止めました」

「じゃあ、ずっと家に？」

「いえ、自分でみんな運動してますよ。他人に迷惑はかけないので、勝手にさせてます。世話は大変ですが…」

リュウが急にくしゃみをした。

「他の3匹は母親と子供ですか？」

「ええ、そうです！」

向こうから子犬を連れた中年の女性が近づいてきた。リュウは急に耳を立てて鼻を鳴らした。子犬の方に向かって私を引っ張った。

「子犬が2匹ですか？」

老人は独り言のように呟いた。

「ええ」

「オスですか、メスですか？」

「両方です」

「ほう！ そりゃいい！」

私はリュウに引かれて立ち上がった。子犬もリュウの方に来たがってその女性を引っ張っていた。

「お先に失礼します」

私は振り向いて老人に云った。老人も愛想良く頷いて立ち上がった。私は子犬と反対の方向へリュウを引っ張って行った。

「良いご家族ですなあ」と老人が云った。

「えっ！」

私は思わず振り返った。老人は片手を振って子犬の方へすたすたと歩いていった。

私はそれから嫌がるリュウを無理矢理別の道に連れていった。

家に帰って、変な老人に会ったと、例の話を圭子に聞かせた。圭子は大笑いをした。あまり可笑しいので苦しいという。私もつられて笑った。

「あんたの嘘は、自分じゃ旨く云ってるつもりでも直ぐばれるのよ」と、圭子はまた笑った。

「そうかなあ・・・？」と私は頭を傾げた。

「そうよ！人が良すぎるのよ！」と、また笑う。

私は妙な気分だった。

(次号へ続く、次号最終回)

新企画構想の募集等について

(1) 次号で連載小説「リュウ」が完結します。

新しい企画を募集します。こんな企画があればいいなあと思うことをどしどし遠慮なく編集部にご連絡下さい。(締め切り10月末日)

(2) 大図研京都支部のインターネットホームページを立ち上げたいと考えています。

このホームページの内容についても企画を募集いたします。

こんなホームページ、あんなホームページにと、会員のみなさんの希望を寄せて下さい。

(3) 連載小説「リュウ」が完結したら、ご感想の投稿もお願いします。

(4) 応募・投稿は、いずれもメールで下記アドレスへ送信して下さい。

kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp

